障害児教育実践センター研究紀要　第４号，69-71，2005

＜実践研究＞

２歳吃音児の左手による描画 (2)

早坂　菊子*・宮本　昌子**・糸原　弘承***

この論文の（1）で，２歳４ヶ月でも左手で描く意味についてのべた。本論文はその続きである。左手で描くのを嫌がっていたのが，幼稚園に入ったあと自発的に描くようになった。吃音はじょじょに波を描きながら軽快していった。軽くなって半年，全くなくなって４ヶ月を経過している。本児の吃音が１年で軽快化したのは，U仮説でいうU1-A-2であったからであると考える。内面因子がしっかりしていると，吃音はなおりやすいことがわかった。

はじめに

「２歳吃音児の左手による描画」で，３回までのセッションの様子をかいた。その時から１年たち吃音は消失した。その経過をまとめてみる。本児は年少のこともあり，どもりはじめてすぐに治療を開始したこともあって波をえがきながらであるが，改善をみた。「幼児吃音の類型化診断の基本的枠組み」（早坂菊子他1998）（図１）によるとU1-A-2であり，なおりやすい吃音であったと考えられる。左手で描くことはいやがり，さりげなく左手に渡しても右手に持ち替えてしまう。左手で描いたあと開放された様子はみられない。しかし吃音が消失して３ヶ月ほどたった頃自発的に左手で描いた。（図２）特に開放された様子はみられなかったが，左手で描くことへのこだわりがなくなっていることがわかる。しかし本児にとっては左手で描画する意味はなかったと考えられる。やはり，悪化条件が少なく維持条件がない，改善条件をもっている幼児はなおりやすいと考えられた。

臨床の経過

１．４回目

１ヶ月間吃音が出ていない。発吃後はじめてのことである。プレイ中も症状はないが，発話量が少ない。描画は右手を使うが「左手で」というと持ちかえる。

２．５回目

吃音が出る。つまっていたが今は深呼吸をしたり力を抜いている。時間がかかって思うように言葉がつづかない。要因としては，姉が学校が夏休みとなり，ストレスになっているのではないか。けんかをする。姉のやっていることをとって姉を泣かせてしまう。母親はわがままをさせてしつけをとる方がいいのですね，という。良くわかっている。プレイでは左手で描きたがらない。発話量は前回より多い。吃音ははじめの言葉が出にくくて息を吸い込んでいる様子がみられた。

３．６回目

くりかえしが目立つがくるしそうでない。先回の論文で描いた時と変わって扱いやすくなった。プレイでは声掛けをすると右手から左手にもちかえる。帰るときは「おわり」を聞き入れず無視していた。これは家でもよくあることである。

４．７回目

吃音は２～３回の力の入ったくりかえし。くるしそうな様子はない。プレイ中話をしてくれるようになった。年齢のせいもあるが構音が不明瞭である。聞き辛い。

５．８回目

この１週間どもらなくなっている。落ち着いている。頑固さは少しとれた。だがカッとなりやすい。プレイでは自分のことを話していた。吃症状はほとんどない。

６．９回目

どもらなくなっている。姉とのけんかもだいぶ落ち着いてきた。プレイでは自分のことを話していたが先回と同様構音が未熟で何を言っているのかわからない。吃症状はほとんどない。

* 広島大学教育学研究科附属障害児教育実践センター
** 福山平成大学
*** リハビリテーションカレッジ島根

	U1	U2	U3	U4
内面因子（維持条件） 外面因子 （悪化条件）（改善条件）	○○	○	×	××
R○　D○	A-1◎	A-1○	A-1☆	A-1△
R○　D×	B-1◎	B-1△	B-1△	B-1×
R×　D○	A -2○	A -2☆	A -2☆	A -2×
R×　D×	B -2○	B -2☆	B -2★	B -2××

◎予後はきわめて良好　★予後は治療効果に依存するが悪い
○予後は良好　×　予後は悪い
△慢性化が予想される　××予後はきわめて悪い
☆予後は治療効果依存

図1　幼児吃音の類型化診断の基本的枠組み

7．10回目

吃症状は1週間落ち着いているが，その前はいとこ（男）にしゃべり方についていじめられてしゃべりにくそうにしていた。プレイでは1音節の力の入った繰り返しが出ていた。発話量は増えたが内容が何を言っているのかわからない。

8．11回目

吃音は初頭音の引き延ばしがあるが，気にならない程度。プレイ中は1～2回の繰り返しと引き延ばしがみられる。うーと言ってから話す。本人はあまり苦しがっていない様子であった。

9．12回目

吃音は少なくなっている。初頭音をつまったり，伸ばしたりするが，苦しそうではない。知らない人間が聞いたらわからないくらい。プレイでは初頭音の繰り返し，言葉の前にうーの挿入があるがあまり目立たない。かなり慣れてきており自分のペースでセラピストに指示したりして遊ぶ。構音が以前より明瞭になってきたため，言っていることがかなりわかるようになってきた。内容的にも文の長さから，レベルの高いことを表出していると思われる。

10．13回目

引き延ばし，3回の繰り返し，しゃべりにくそう，苦しそうな顔をする。プレイでは緊張していない。沢山話す。2回だけどもった。

11．14回目

吃音は少しづつ落ち着いている。プレイではセラピストが変わったが，恥ずかしいのかプレイできない。

12．15回目

吃音は落ち着いていてでない。新しいセラピストになれる時期が短くなった。人にゆずること，カッとしなくなるなどお姉さんになった。姉と仲良く遊べる。以前は沢山子供がいるとひいていたが，今は良く遊べる。たくましく自分で考えられるようになった。困っている人がいるとなんとかしようとする。プレイではすんなりプレイに入れた。自分からプレイを提供できる。説明場面で3回の繰り返しがある。

13．16回目

（1ヶ月半あいていた）幼稚園に入った。1週間泣いていきたがらなかった。2週目には楽しくいけるようになった。吃音は全然出ていない。園でも気になることはないと言われた。プレイでも吃音は全然でなかった。

14．17回目

吃はない。園では良い子，家では悪い子の差がある。プレイでは発話量多く，良く気がつく。

15．18回目

幼稚園楽しい。吃らない。しっかり考えてからしゃべろうとしている様子。プレイでは1回もどもらなかった。遊びがまとまってきた。

考　察

平成17年3月25日（15回目）から現在（7月29日）まで吃音は落ち着いている。幼稚園に入るという大きな環境の変化にもかかわらず吃音はなくなっていっ

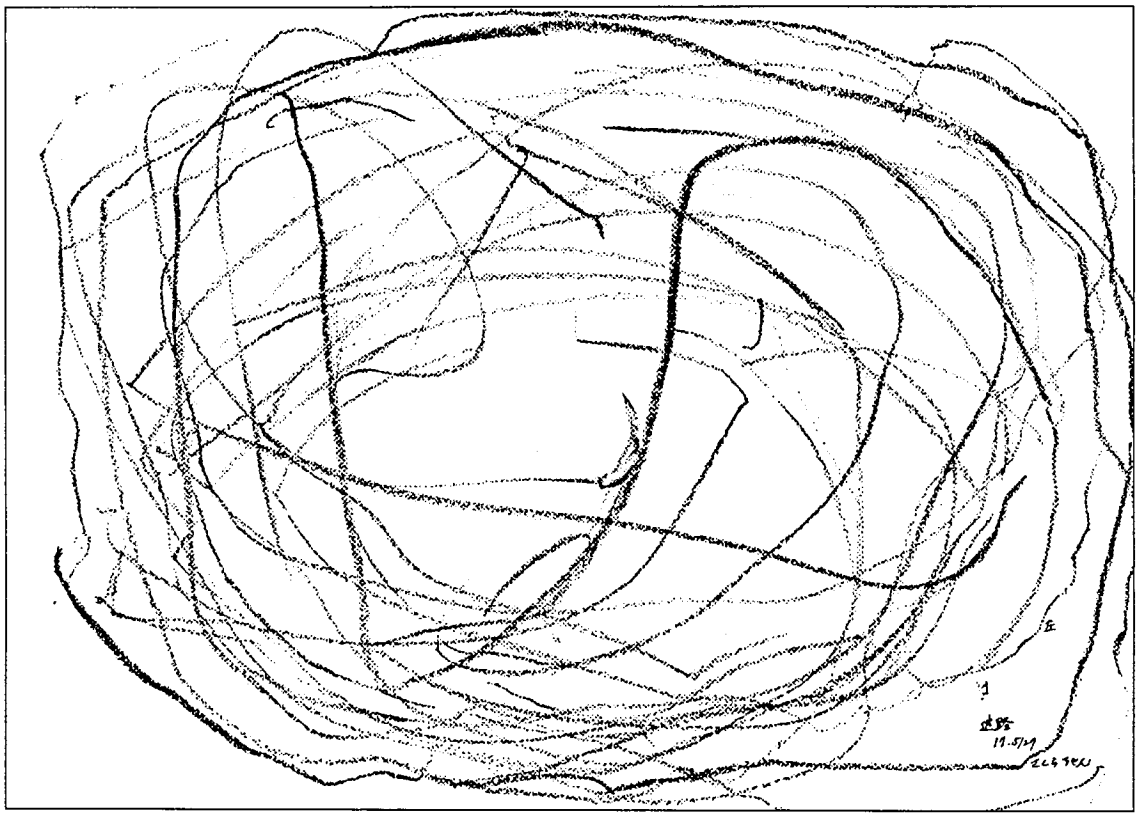

図2　左手

た。この頃自発的に左手で描画した。色をいっぱい使ってのびのびとした線を描いている。

発吃後2ヶ月で治療をうけたこと，吃音が軽度であったこと，維持条件がほとんどなかったこと－対人過敏性はあったがすぐにとれむしろ周囲を仕切る様子であった。－などが本児の吃音を軽減させた要因と考える。左手で描画させたことは本児にとって意味のないことの様であった。しかし強制的に左手で描かせることはしなかったにもかかわらず，治療終結近くになって自発的に左手で描き始めている。心が開放され，のびのびしてきたあらわれと考えられる。こうした開放的な姿と吃音の軽減は，やはり意味があるのではないかと思われる。

文　献

早坂菊子，小林宏明　言語発達遅滞型吃音幼児の診断・治療過程－U仮説に基づいて－音声言語医学　Vol.39, No.4 1998

早坂菊子，宮本昌子　2歳吃音児の左手による描画　広島大学大学院教育学研究科附属障害児教育実践センター研究紀要　Vol.3, 67-69 2005